



# 兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせるー情報と通信の1990年代ー」を見て（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

真田，尚幸

---

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:106-109

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505416>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505416>



# 兵庫県立歴史博物館特別展 「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる ―情報と通信の1990年代―」を見て

真田 尚幸

## 一 はじめに

本展覧会は一九九五年一月十七日に発生した阪神・淡路大震災から三十年のタイミングで兵庫県立歴史博物館において二〇二五年一月十一日から三月十六日の期間に開催された展覧会である。訪れた日には関連企画として開催されていた学芸員の吉原大志氏による講演会にも参加した。

本題に入る前に筆者と震災の関係を少し記しておきたい。筆者は当時神戸市灘区内で両親と暮らしており、自宅で就寝中に震度七の揺れに襲われた。幸い自宅は倒壊を免れ、両親とともに怪我もなかったが、本展覧会のテーマである通信がいったん遮断され、その後時間をかけて回復していく状況を体験している。このように記すと被災者として様々な状況を経験したと思

われるかもしれないが、インターネットの無い時代に震災当日にリアルタイムで見たものは、実際に自分の目で見たものだけであり、このような大災害で起きたことの大部分は後日知ったものである。例えば、被災したJR六甲道駅の駅舎は当日午前中に実際に見ているが、倒壊した阪神高速道路や長田区の火災の様子を見たのは震災三日後の夜に一時避難した親戚宅で見たテレビによるものである。

このような体験が展示を見た印象に影響を与えていることは間違いないが、その点はそのままに筆者の目線で記述したいと思う。

## 二 展示の概要

震災をテーマとした展覧会では物的な損害や復旧が主になる

ことが多いが、この展覧会では情報と通信に焦点があてられていることが特徴である。タイトルにある「伝える・知らせる」には二つの意味がふくまれており、ひとつは震災時に被害の状況や必要な情報を同時代の人たちに伝え、知らせること、もうひとつは震災の体験を記録し、次の世代へ伝え、知らせることである。

展示は4部の構成である。最初に「1. 情報と通信の1990年代」として、情報を伝える手段および情報を集める手段の推移について定量的に示され、展覧会を見るにあたり必要な基礎知識の共有が図られている。固定電話や公衆電話がなくなりつつ中で、これらの情報は当時の通信状況を知らない世代と最初に共有しておくことで展示の意図がより伝わりやすくなると感じた。またここでは、兵庫県の人口動態と登録外国人の数の推移についても示されている。当時の状況を知る世代としても、具体的な数字を意識する機会はあるのではないので、後の展示を見るために必要な情報である。

次に「2. 被災地を伝える」として、「震災時に被害の状況や必要な情報を同時代の人たちに伝え、知らせること」について、地元のメディアである神戸新聞、サンテレビジョン、AM神戸（現ラジオ関西）を事例に具体的な状況が示される。神戸のような地域の中心都市を含む災害では報道機関も大きな被害を受け、その社員の多くも被災者となる。そのような中でも取

材を続け新聞が発行され、テレビやラジオも震災当日から放送をしていた。震災当日に地元から情報発信がされていたことを知らない人は筆者を含めて被災者にも多いのではないかと思われる。

また公共通信インフラである電話の復旧の様子についても展示された。固定電話の復旧は地域としての電話回線の復旧と個別の被災により住居・電話機を失った人への対応となるが、前者については移動電源車による電話交換機能の復旧の様子を、後者については公衆電話やFAXの避難所や公共機関への設置の様子で、それらの様子が残された写真により確認できる。我が家は幸いに固定電話が無事であったが、しばらくは非常に回線がつながりにくく、日没後は懐中電灯の明かりで何度もダイヤルしていたことを覚えている。

「3. 必要な情報を伝える」では被災者に必要な情報を伝えることについての展示となる。災害発生時には被災地にいる人々に衣食住などの生活に関わる情報提供をすることが大切な意味を持つが、テレビやラジオのような通常の情報収集手段に接することができない人も多く、接することができた場合でも個々の人々が必要としている情報をタイムリーに得ることができていたわけではない。展示ではそのような状況でボランティア団体が発行したミニコミ誌を通して被災地の課題やボランティアの役割について示している。

また日本語話者ではない外国人向けの情報発信にも着目し、多言語の情報発信と多文化共生として、そのような被災者に向けた情報発信に取り組む市民によるラジオ放送局の立ち上げの様子について紹介されている。

これらの情報伝達活動は目の前の生活支援からはじまったが、公的支援を求める動きや復興政策の施策の中から神戸空港建設問題や長田区のまちづくりに対しての市民の活動へ広がっていったことが紹介される。

最後に「4. 体験を伝える」は、震災の体験がどのように後の世代に伝えられてきたかについての展示である。文化や芸術に携わる人々が言葉だけでなく様々な表現手段で震災と向き合った様子が紹介される。詩や写真、絵画による表現活動に加えて体験手記を集める活動や語り部の活動について紹介される。

### 三 展示評

本展覧会では「伝える・知らせる」をテーマに改めて阪神・淡路大震災を見つめ直すことができる内容であった。

前半の展示では震災時のメディアや情報インフラの状況を知ることができる内容であるが、展示を見て当時の状況を思い出した人もあれば、筆者のように当事者でも新たに当時の状況を知ることができた人も多いのではないかと思う。このコーナー

ではラジカセやFAXなどモノの展示も多く、これらを使ったことのない世代にとつては三十年前の最新情報機器を実際に見る機会になったのではないかと思うとともに、当時の生活を知る世代にとつては災害とは関係なく懐かしさを感じる人も多かったのではないかと思われた。また当時の新聞を見ると、震災直後にこれだけの情報を発信していたと驚くとともに、発信されている情報は実際に起きていることに対して質も量も十分ではなく、被災地外に生活していた人が当時これらの情報をどのように受取っていたのかも気になるところである。

後半ではミニコミ誌を中心に被災した地域での情報伝達の様子を知ることができる。大手メディアと異なり、その場所に必要な情報を混乱の中で発信した発行者の苦労が展示品を通して伝わってくる。また多言語の情報発信に焦点を当てていることは今回の展示の特筆されるところであると考える。現在ではバリアフリー法の整備などにもない日常生活の場面でも多言語に対応した情報が増えてきているが、そのような対応がほとんどなかった当時に市民から多言語による情報発信の動きがあったことを知る人は多くはないのではないかと考える。筆者自身もFM開局の動きなど初めて知ることが多かった。ただ、この展示エリアは情報が多く避難所から行政や外国人まで様々な焦点が移り、展示をみていて混乱しそうになることもあり、テーマごとにはつきりと区分されている方が個々のテーマに対して

向き合いやすかったのではないかと感じた。

最後に震災の体験がどのように伝えられたかについての事例が紹介される。筆者が注目したのは体験を伝え・語るには相應の時間が必要であるということである。筆者自身もこれまで公に自身の体験を語ることにはなかったが、震災から三十年近く経て当時の自宅の周辺の写真を神戸大学附属図書館震災文庫に寄贈し、神戸大学の跡部史浩氏（特命助教）に当時の状況をお話する機会を得た。詳細は省略するが、それぞれの体験を人に伝えるには時間やきっかけが必要である場合が多いことは間違いない。

またこの展覧会に神戸大学大学院人文科学研究科・文学部の学生および教員が準備に関わっている。学生のみなさんは震災を知らない世代ではあるが、当時の資料に向き合い、話の聞き手になりながら、今回の展示に関わったということである。このような取り組みは、若い世代が震災を知り、学ぶ機会となるだけではなく、新たな語りを引き出すきっかけにもなるのではないかと感じた。

#### 四 おわりに

自身の体験を交えながら様々述べてきたが、三十年の時間を経てこのような展覧会が企画されることで、震災を体験した人

もそうではない人にも、一人一人思いをめぐらす機会を得ることができたことに大きな意味があると思う。今後も何らかの形でこのような場が設けられることを期待したい。